

昭和二十七年八月十五日 発行（九月十五日発行）
昭和二十四年七月二十三日 第三種郵便物認可

（通第四十一号）

慈光

第四卷・第八號

目次

親鸞におきては ただ念仏して	花田正夫	(1)
無碍の一道	福島政雄	(5)
道宗心得二十一箇條抄		(10)
赤尾の道宗を憶ふ	長谷顯性	(11)

親鸞におきては
ただ念佛して

花田正夫

身の危険をもちかへりみないではるばる京都の聖人をお尋ねした関東の同行方に先づ「ひとへに往生極樂の道を問ひきかんがため」と聖人は、求道の目標を一点に高く掲げられた。更に「念佛よりほかに往生の道も法文も一切存知せぬ」と御自らの愚柔の姿を吐露せられて、善悪沙汰や法文沙汰や、善鸞の異義や、法難に遭うて迷ひ惑ふ信心の子に先づ自省を促され居すまひを訂されると共に、とつておきのかなめ「親鸞におきてはただ念佛して云々」と聖人の自信を語られたのである。私はここで、長い御慈育を被つた池山栄吉先生と近角常観先生の御言葉を思ひ浮べる。池山先生は

『私は社会事業の方面で労働問題を提唱して来ましたが種々のいきさつを経て自分を省みるやうになり、自分は社会を善くしようと願つてゐるが、ほんたうに自分を支配してゐる主動力が名利心であると氣付かされ、真実の善の出来ない身としらされて、生死解脱の道どころか、地上の名誉、それは私の心の殆んどを占めてゐた願であるが、省みて自らのむなしさを知るに及んで、それさへも断念せねば

とやつて見ましたが、自分は一生懸命に宗門のためにやつてゐるのに、世間は一向に動いてくれない、他人がそれを認めてくれない、そこで淋しい心になり、はては世間の人は頼りにならぬといふ風に、自分から人を距つて居りましたが、自分がよい人がわるいと思つてゐるまんま、「共に是れ凡夫のみ」で、自分のやつてゐる善も真実ではない矢張り人が認めてくれぬと淋しいといふのが人に認められるための善であつた、これでは自分が悪いとなつて、それから長い間煩悶いたしました。とうとう最後に、この悪の方にばかり負けて、微塵もよくなれない者を憐んで下さる方が佛であつたと氣付かせてもらつて、すつと今日までやつて来ました』

かう云ことを諄々と御述べ下さつた。

今私が特に両先生のお言葉を思ひ浮べるのも「親鸞におきてはただ念佛して」と関東の同行に語られた聖人の面影が、そのままそつくり両先生に浮彫され再現してゐるからである。扱て次に聖人は「念佛はまことに淨土にむまるるたねにてやはんべるらん、また地獄におつべき業にてやはんべるらん総じてもて存知せざるなり」と仰られる。これは善悪沙汰、法文沙汰、善鸞の異義等に自然に答へられたお言葉であらう。一切老少善悪の衆生は、夫々の業報の差はあるが、すべて苦海の沈論をまぬかれぬ者である。そのことをみそなほし給うて、こゝに淨土の慈悲があらはれ「本願を信じ、念佛を申さば佛になる」と勧められるのである。そのこと一つを聖人

ならぬ、よしんば與へられたにしても虚名でしかないとなつて明日への希望が絶たれて了うた。自由を奪はれたのではない、自由はそのまま與へられながらも、それでゐてもうどうすることもならなくなり、遂に四十二歳の時、「親鸞におきてはただ念佛して」の一句がヒョッコリ心に浮び、嗚呼聖人もどうにもならなかつたのか、その聖人が「ただ念佛して」であつたのか、ぢやあ私も、と、「南無」と一声浮ぶのをきつかけとして堤を破つて水があふれるやうにとめどなく念佛が出て、今迄の淋しさ、暗さ、苦しさ、たのもしさ、ありがたさかたちけなさに転ぜられて、ああこれが信仰であつたかと始めて氣付かされたばかりです』と常に語つて下さつた。

近角先生に親しく御話を承つたのは昭和十六年の秋であつた。御講話では淨土の慈悲といふことを數異抄の四章を御引用になつて、特に私のために池山先生の入信の話をして下さり、引き続き会館の応接室で

『私は青年の頃、宗教界をよくせねばならぬと思つて種々

は繰り返しまきかへし関東で御説き下されたのである、然し六十過ぎられて聖人は京都に帰られ、惠信尼公も越後に去られてのち、教團の人々は夫々の有縁の師について念佛申すやうになつた。そして善鸞中心の教團にはならなかつた。そこに善鸞は聖人と他の弟子との間をさくやうなこともたくらみ且つは「父なる親鸞から極く秘密の口伝をうけてゐる、眞の淨土に參りたい人は自分の所で聞け」と言ひふらし、念佛だけでは淨土には參れぬと説いたのである。このことに對して聖人は「念佛よりほかに往生の道も、法文等も一切知らない」と答へられ、更にこゝで往生のたねとか、たねでない、といふことを重ねて破せられたのである。

又善悪や學問沙汰の人々の説「ただ念佛を信じ称へるだけではたすからぬ、遂には地獄におちる」といふ風な異義にもお答へになつてゐる。

聖人は飽くまで愚禿の身、知目とこしなへに閉ぢた身と信知せられてゐる。元來我々が本願を信じ念佛を申すのも、我身に智慧があり力があつてのことでない。ひとへに釈迦彌陀二尊の慈悲善巧の賜である。盲亀が浮木に遭ふ譬こそ全く我等の姿である。我等としては石童丸がはるばる九州のはてから父をたづねて高野に登つたが、悲しい哉、父に遭ひながら父と見分けることの出来ない身には、空しく下山する外なかつた如く、久遠のみ親を知る力は毛頭ないのである。さう云ふ愚者の故に、親の方から無限の慈悲を注いで下さつて、遂に本願を信ぜしめ念佛を行ぜしめて下さるのである。我等とし

ては淨土のたねやら地獄のたねやら全く見分ける力はないと申す外はない。この聖人の御言葉に浴する時、念佛が淨土のたねだとか地獄の業だとか言ひ張つてゐる人達も、その争ひの病根が、抜き去られる、そして是非善惡を争うてゐる身のあさましさがおのづと照し出される。かうした聖人の告白に接しては、反駁するにも、誹謗するにも、そのよすががない。「魔界外道も障碍することなし」との無碍の御徳にふれる。相對界にすむ我々としてはつねに聖人のこの御意趣をよく頂かねばならぬ。

「たとひ法然上人にすかされまいらせて、念佛して地獄におちたりともさらに後悔すべからずさふらふ。そのゆへは自餘の行をはけみても佛になるべかりける身が、念佛をまゝうして地獄にもおちてさふらはばこそ、すかされたてまつりてといふ後悔もさふらはめ、いづれの行もおよびがたき身なれば、とても地獄は一定すみかぞかし」

すでに無智の身を告白せられた聖人は、ここでは「いづれの行も及び難き身」、とこしなえに行足を欲く身であると打ち明けて下さるのである。知目とこしなへに閉ぢ、行足とこしなへに欲くる身は、その者のゆえに、「われ知目とならむ、行足とならむ」とのお誓ひ一つがたのみである。

無明長夜の灯炬なり

智眼くらしとかなしむな

生死大海の船筏なり

罪障重しとなげかざれ

『彌陀の本願まことにおはしまさば、積尊の説教、虚言なるべからず、佛説まことにおはしまさば、善導の御釈虚言したまふべからず、善導の御釈まことならば、法然のおほせそらごとならんや、法然のおほせまことならば、親鸞がまうすむね、またもてむなしかるべからずさふらふか』

聖人はここでは假説的な表現をせられてゐる。「まことにおはしまさば」「まことならば」とか「むなしかるべからずさふらふか」がそれである。これこそ金剛の信心にそなはる寛容の徳風である。

聖人の信眼には、大勢至菩薩を本地とせられる法然、大海の化現としての善導、久遠実成の阿彌陀佛の応現としての積尊、さうした一切の根源に存する報身佛としての尽十方無碍光佛、が映つてゐる。本誓重願むなしからず、淨土真実のひかりがそのままに地獄は一定の聖人の御身にしみとほつてゐる。そこに「親鸞がまうすむねまたもてむなしかるべからずさふらふか」の確信がある。

又「虚言なるべからず」とか「そらごとならんや」とか「まことにおはしまさば」と言ふ語で、彌陀、釈迦、善導、法然、親鸞と結ばれてゐる。その全体の語調に、彌陀佛の不虛作住持功德の成就せられた淨土真実のひかりがみちみちてゐてまばゆいばかりである。維摩經に舍利弗が佛の淨土を現実の世相に執はれて疑ひ申した時、太陽は盲人に見えないがあるのだといふやうな御説法ではなほ疑が晴れなかつた。佛陀はそこで足の指で大地をおし給ふと、不思議にも世界が一

すでに我身は罪障の重さに浮ぶ瀬のない身である、嗚呼しかるに何たる大無辺の願力であらうか、長夜の灯炬まします、大海の船筏あらはれ給ふ。この上は、よしんば法然上人にすかされまゐらせて地獄におちたとても後悔するところはなとの思召である。全くまかせられた御心である。「後悔せず」と言ふ風なりきみ心はちちつともない。「地獄は一定すみかぞかし」のどん底にあつて、「後悔するところはありますん」とひとへに救ひの船に打ちまかされてゐられる。

このころこれを阿闍世とのたまひて

見捨てじといふみ慈悲なりしか

よしあしは人にはあらん大惡の

阿闍世われにはよしあしはなし

とは近角常音先生の御歌である。わが御心の中に大惡の阿闍世を見出されて、ただ見捨てじとの大悲一つに両手のはなれ給うたお姿である。法の深信の裏は機の深信である。「ただ念佛して彌陀にたすけられまいらすべし」とよきひとの仰を被りて信するほかに別の子細なきなり」の法の深信はそのまゝ「いづれの行もおよび難き身なれば、とても地獄は一定のすみかぞかし」の機の深信である。機法二種の深信こそは善導法然の両師が伝承の骨子である。

聖人はすでに語るべきことを殆んど終られた、もうこれ以上もなく、これ以下もない。然し聖人の教を承りながらもなほも低迷してやまぬ人々を見出されて次の御言葉が流れた。

転して淨土の莊嚴がさながらに顕現して舍利弗も百宝の蓮華に座らされてゐるのを見て歎喜と驚異にうたれたと説かれてゐる。私は聖人のこの御言葉をとほして淨土の真実のひかりを合掌せしめられる、旭日が東天に浮んで海上の波が金波銀波に輝やく如くである。

最後に「愚身の信心におきてはかくのごとし、このうへは念佛をとりて信じたてまつらんとも、またすてんとも面々の御はからひなりと云々」と結ばれてゐる。

惟ふに知目なく行足缺ける身としては自利の道も絶え、利他の道もこしなへに塞されてゐる。そのことを明らかに諦観せられる聖人は自利利他ともに彌陀佛の本願力一つに充足して居られる。だから言ふべきことを言ひ終へられると、白雲が悠々と去来する如く、無理勧めの微塵もない、自然法爾の御姿を拜する。

聖人と関東の同行とのこの会見は、聖人八十四歳の御時善鸞義絶の書状が出されてゐるところから押して、尠くともその前年か前々年のことであらう。聖人はすでに八句を越えられた頃の御教化であると信する。なほこの二章の全体を通じて「たとひ一代の法をよくよく學すとも、一文不知の愚鈍の身になして、尼入道の無智のともがらに同じて、智者の振舞をせずして、唯一向に念佛すべし」との法然上人の一枚起請文がそのまま聖人の御身に体现されてゐるのに驚き、且は渴仰申すことである。

無碍の一道

福島政雄

善財童子は文殊菩薩に照されて南へ南へと知識を求めて参りました。或ひは山の寂けさ、或ひは海の姿に十二因縁を教へられ、或ひは方便命バラモンに理想の幻影を示され、或は少年の純真さに打たれ、又は在家の婦人の妙香に淨められ、次に表に暴君をよそほふ満足王の妙方便を伝へきくのであります。これが前号までの大体の道行きであります。

次に目立つた善知識を申し上げますと、險難国の宝莊嚴城といふ所を善財童子が訪ねて参りますと、バスマツタといふ女が住まつて居ります。このバスマツタは実に容貌が立派で一切の相好が具つて居り、これが善知識となつて居ります。段々善財童子がその女を訪ねて参りますと、或る人は不心議に思ひ、一体この少年は清淨無垢な立派な少年であるが、バスマツタはいかがはしい女である、どうしてこの純真な少年が訪ねるのであらうかと言ふ者もある。又いやあの女はあれで中々立派な徳を具へて居ると言ふ者もある。賛否交々の中に善財童子はバスマツタを訪ねて参るのであります。女は獅子の座に坐つて居て、その貌は端嚴で、身は眞金の如く実に美しい身体をしてゐる。そして善財童子に答へて申しますには、

『私をもし天人が見ると天女の姿に見えます、又普通の人間が見ると普通の女に見えます。若し欲のために苦しむ者が私の許に参りますとその衆生の為に法を説いて欲に執着しない心をひきおこします。さう云う衆生が私を見ると慶ばしい心をおこさし、私と話をするとたえな音楽のやうに聞えるのであります。若し私の手をとると一切の佛の世界に詣ることが出来、私の家に泊る人があれば解脱光明三昧が得られます。又もし眼で一目でも私を見ると一切の行が静まつて行きます。又私が顔をしかめてゐる姿を見ると、あらゆる外道を壊して了ふと云う境地がひらけ、もし私の姿をよく氣をつけて見ると一切の佛の世界がひかりかがやくのを見ることが出来ます。私を抱擁する者があれば、一切の衆生を自分の胸におさめとる心となり、私と接吻すると諸々の功德を一つに藏めつくすといふ三昧を得るのであります』

と申すのであります。

私は佐々木月樵先生の講話を広島で始めて聞きましたが、晩年大谷大学の学長時代には善財といふあだ名を持たれた程の人でありました。その佐々木先生がバスマツタとは久遠の

女性を表徴されたものだと言はれました。ここでは感覺的なことを頗に説かれてゐます。御婦人の方からどう思はれるか知れませんが、西洋でも云はれてゐるやうに、男性が概念的であれば、女性も感覺的であります。男は理屈っぽい、女は感覺的直観的であります。是所に感覺的なことを述べてゐるのは、女性の本質を述べて、人生がそれによつて壞されるのが柔けられもする、かやうな善知識を善財童子の前に出すことによりまして久遠の女性の姿を表現されてゐると思はれます。子が産れた時から母は乳を與へ感覺的接觸をして哺育みます。母親が子につくす有様は感覺の世界に心がこもつてゐます。私共男子は子供に対して概念的であります。子供の病氣の時でもさうで、母親は直接に指圧やら、摩擦やら、腹を押してやつたり致します。父親より母親の方が眞剣で、男の方は廻りくどいのであります。男性の側から云へば、自分は先々のことを考へて子供を育ててゐるが女にはわからないと考へ、女性の側では自分は直接かやうに嘔むで居るのに、男性のやることは廻りくどいといふやうに感ずるものであります。

それから善財童子は次から次へと善知識を求めて行くのであります。段々善知識が人間が自然そのものかといふやうになつて参ります。始めから善財が訪ねる知識は五十二でござりまして、十住、十住、十行、十廻向、十地、等覺、妙覺であります。これは菩薩の修行の五十二段階を現はして居りますが、文殊菩薩が二度知識として現はれて居りますので五十

三となりません。十住、十行、十廻向、これを地前の三賢の位と名付け、十地となりますと今度は聖の位となるのであります。

善財童子が十地の聖の位の知識を訪ねる段になりますと、その善知識は人間であらうか、何であらうかと云ふやうになつて居ります。聖の位の善知識の第一から第九まで殆んど皆夜天と云ふ名前をついた善知識であります。夜天といふことについて始めは夜空を照す星月を人格化したものかと思ひましたが、その後入法界品に就いて書かれてゐる書を読みまして少し考が變つて参りました。先づかう云ふことを考へ始めました。この夜天は沢山あるが、その大部分は女性である、又現在は男性であつても過去において女性であつたと云ふ因縁物語がついて居るのであります。そこで一体十地を代表する善知識達と云ふものは、その大部分が女性であるといふことは何を意味するのでありませうか。色々の解釈もありませうが、この十地と云ふのは最も深い境界であると云ふのであります。併しその最も深い境界が私共人間として最も手近い所にあるのである、決してこの深い境界は私共人間界を離れて沈思冥想すると云ふ様な所にあるのではない、我々の生活そのものに最も近い所にこの深い境界が開かれる機縁があるのである。又この十地の諸々の善知識達は總て相寄つて私共の家庭を煩惱の道場として、種々家庭問題を提供して居るのであると云ふことに段々私の考が向いて参つたのであります。

第七番目の開敷樹華夜夫は自分の過去に就いて物語つて居りますが、その中に次の様なことがあります。昔淨光王と云ふ王様があつて、その夫人を連華光夫人と云つたが、この王様は正しい道を以て国を治められた。即ちこれは釈尊の父上の淨飯王と釈尊の母上の摩耶夫人の前世であると云ふのであります。詰り父親母親と云ふものを振り返つて、そこに久遠の佛の道を歩む所の父親と母親とを発見した、かう云ふ物語になつて居るのであります。

又九番目の流彌尼園の妙徳圓滿夜天が説法いたします。その説法の中にも摩耶夫人の廣大なる徳を述べられてゐる所があるものであります。

又十番目の瞿夷女と云ふのは何であるかと申しますとこれは釈迦在俗時代の妃の一人であります。かう云ふことを段々考へて参りますと、詰り十地と云ふあの全体が、段々と家庭問題の一番肝要な所に觸れて参るのであります。さうして最も深い道が、最も近い家庭そのものに於いて觀ぜられるのであります。

十地の善知識に就いて色々の物語がありまして様々の面白い味ひがあります訳でありますが、今日は第十番目の善知識である瞿夷女に就いて申上げます。

瞿夷女は悉多太子におつかへ申した妃の一人であります。それが五十段目の善知識となつて居ります。この瞿夷女の所を説みますと、その前生の因縁物語があります。

昔々、大昔のこととあります。妙徳童女といふ少女がありてあります。瞿夷女は斯様な結婚を前生においてすでにやつてゐるといふ物語になつてゐます。

これは家庭の妻と云ふ立場にある者が、第五十番目の高い位を代表する善知識であると教へられます。私共が私共自身の實際の家庭生活を考へて見ますと、私共の人生に於て一番駄目なる所は何処かと言へば是は家庭であります。世間に向つては如何にも立派に見える人でも、その家庭の妻と云ふ様な人の立場からその主人を見ると随分缺點だらけであります。實際私共が人生に於て一番失敗する所は家庭であります。詰り家庭は煩惱の道場であり、その家庭に於ける煩惱と云ふものは最も退治し難い煩惱であります。私は教育論を述べ、家庭が大切である、母親が大事だと三十年來論じて來ましたが、私の家庭はうまくいつてゐないのであります。私の妻を五十番目の善知識として拜むことがあるかと申しますとたまにチラツと感ずることもありますが、大きなことは言へませぬ。

瞿夷女は太子に奉仕した女性であります。それが私共の忘れはてた前生からの善知識であつたといふことを教へられますと、夫婦の間係といふものは深い意味をもつて参ります。私は私の妻を觀音とか善知識とか口ひろいことは申されませんが、かかる相対的女性が善財童子にとつて、妙覺の世界から三番目の高い位の善知識であることは、私共に非常に考へさせられますこととあります。

次に摩耶夫人が善知識となつて居ります。五十一番目の等

ました、大變優れた容姿を持つて居りました。この少女の姿がその国の太子の目に止り、太子はこの少女を恋ひ慕ふやうになり、是非結婚したいと願はれた。妙徳童女もこの太子様を慕ひまして嫁ぎたいと云ふ風になりました。愈結婚の約束をされようとする前に、太子は次の様に語られるのであります。自分は求道のためにはどんなことをするかも知れぬ。財宝はもとよりのこと、妻子も、自分の手足、腦髓に至るまで與へるが、お前はそれによく堪え得るかどうかと尋ねるのであります。すると妙徳童女は、敬んで御教に従ひます、たとひ出家をなさると云ふことがありましたが、それを妨げると云ふことは致しませぬ、どんな苦惱をいたしましてもお従ひ申しますと答へるのであります。

ここに最早煩惱の享樂だけの恋愛結婚ではなくなり、永遠の求道の伴侶となるのであります。所が妙徳童女が或る晩に夢を見るのであります。その夢から醒めて、自分は実に美しい夢を見たものであると考へてゐると、空中に声があつて「お前が見た所は勝日光佛と云ふ佛様である、その佛様がさとりをひらかれて七日程経つて居られるが、今その道場には諸々の菩薩方が沢山集つて居る、そして毎日佛様の教を聴いてゐる」かう云ふ声が何処からともなく聞えて來るのであります。その声を聞きますと不心議にこの童女に非常な力が湧いて來るのであります、そして太子の前に参りまして合掌して我身を太子に自ら薦めるのであります。そしてどんな苦勞もよくたえて太子と共に菩薩の道を修めて行きたいと申すの覺の位、即ち佛と覺が等しいと云ふ高い位になつて居ります。摩耶夫人は佛母でありまして、母親は非常に高い所の善知識となつて居ります。

最後に普賢菩薩は善財童子は訪ねるのであります。そこまで参りますのに、最初に申した通り、文殊菩薩は善財の求道の始から影の形に添ふ如く付き添うて善財の後から智慧の光として身に添うてゐるのであります。善財童子は百十一城を経て普門城に至ると經には書いてありますが、さうすると文殊菩薩は遙に右の手を挙げて善財の頭を撫でたとあります。併し文殊菩薩はもう善財の前には現れないのであります。是は現れない筈で、文殊菩薩は善財の云はば背景になつて居る後光になつてゐる。智照無二と云ふのはそこであり、そこに文殊の智慧と云ふものがあつて、その智慧で善財の暗い所が照されてゐると云ふのではなく、明智そのものが善財の背景になつて居るのであります。照す智、照されるものと云ふ相対的なものでなくなるのであります。智照無二に云ふのはさう云ふ所であり、例へば私なら私が、佛がどうであるとか、かうであるとか、佛教を振り廻して居る限りは佛教臭くて仕方がない。さう云ふことであれば私は佛教に於いて決して未だ智照無二の所に至つて居らないのであります。本當の佛教が私の身について居れば、佛教といふことを餘りうるさく言はない筈であります。佛教を振り廻して居るのは私が真に佛教に入つて居ない証拠であります。本當に佛教に

入つた者は佛教と云ふものを事々しうに言はない。さう云ふことは親鸞聖人も言はれて居ります。本當に自然法爾と云ふことが解つたらさう自然と云ふことを沙汰すべきでないと思はれてありますが、是と同じことでもあります。

斯様に善財にとつて始めは相対的であつた文殊菩薩が百十一城を経て、普門城に参りますと善財の中におさめとられてゐる、又は善財が文殊の中に入りこんで了ふのであります。斯くて愈々普賢菩薩に行くのであります。文殊の智慧がそのまんま普賢の行にゆくのであります。善財童子にとつては人生のあらゆるものを知識として、即ちどんなものも善財の求道の前には善知識ならざるはないのであります。それが、無碍の一道を一步一步辿つてゐる姿でありまして、斯る求道が出来たら私共の求道はほんものであります。私共はほんものの求道になつてゐないのであります。

愈々普賢菩薩を訪ねて参りますと普賢の十大願を聞くのであります。これは六十華嚴では足りないので、四十華嚴を見なければなりません。四十華嚴によりまして、次の様に十大願が出て居ります。

第一、諸々の佛を敬うて行きたい。

第二、如来を讚めたたへて行きたい。

第三、広く如来に供養したい。

以上は尽きることのない自分の煩惱を断滅せしめんためにもつ願である。

それで昔から華嚴經を解釈する方々が声を揃へて言つて居られますことは、広大な華嚴の法門と云ふものも、最後に到達する所は、無量壽佛の淨土に往生すると云ふことに帰着する。即ち大無量壽經に帰趣するのである。これは実に有難いことであると申して居られますが、実にその通りであらうと思ふのであります。

さて善財童子の求道物語の全体をかへり見て、最も簡單で最も味ひ深い言葉で言へば、是は無碍と云ふことに歸する、無碍と云ふことを華嚴全体を貫くことであつて、それは即ち善財童子の求道の歷程を貫くものであると言へるのであります。何故ならば、善財童子の求道の前には、あらゆるものが善知識となつて居る訳であります。単に徳の高い人のみが善知識となつて居ると云ふ訳ではないのであります。如何な

第四、煩惱業に就いて無限の懺悔をして行きたい。
第五、一切衆生の功徳を無限に喜びたい。
第六、佛陀にまことの道を説いて下さるやうに転法輪を請ふ。

第七、諸々の佛は入涅槃し給ふこと勿れと請ふ。
第八、限りなく道を求めて精進して行きたい。

第九、一切衆生に順うて、これが苦からのがれることを自分の問題としたい。

第十、他人の爲に総ての善を廻向して行きたい。

善財童子は普賢菩薩にこの十の大なる願があると云ふことを聞くのであります。普賢菩薩もまた永遠に道を求めて行くと言はれるのであります。

これで善財求道物語が終るのであります。四十華嚴におきましては、この普賢菩薩の願の窮極の所はどう云ふ所にあるかと云ふことを尋ねるのであります。そこで、
「自分の生命の終る時は、一切の諸々の障礙を除いて、自分の目の前に阿彌陀佛を見奉つて、速に淨土に往生し、すでに往生してしまつたら、此の大願をまのあたり成就して、一切の衆生にまことの樂しみを與へたい」

と答へられたとなつて居ります。是はどう云ふことを示して居るか申しますと、善財童子の求道の最後の問題は、阿彌陀佛の淨土に往生して一切衆生を利益して行きたいといふことになつて居ります。求道の最後は念佛往生であります、しかしてそれはやがて妙覺の位そのものであります。

る幼き童子も、時にはいかげしいと思はれる様な女と雖も或は海岸の船頭如き人も、怖しい修行をしてゐる婆羅門と雖も、総ての者が善財の求道の前には善知識となつて居る所が無碍であります。如何なるものも善財の前には善知識となる、是が非常に尊いことで、それはやがて親鸞聖人が「一切無碍人、一道より生死を出で給へり」と華嚴經を教行信証に引用されてゐる所以であり、又歎異抄に「念佛者は無碍の一道なり、そのいはれいかんとならば、信心の行者には、天神地祇も敬伏し、魔界外道も障碍することなし、罪惡も業報を感ずること能はず、諸善も及ぶことなきゆゑなり」と聖人が仰せられたことは確かに之に通ふものであります。この善財求道物語といふものはやがて私共の人生に於ける求道の行路そのものの上に最も切実に交渉を持つものであります。

赤尾道宗心得二十一箇條抄

文亀元年十一月二十四日思立候條。

一、後生の一大事、いのちのあらんかぎり、油断あるまじき事。

一、佛法よりほかに、心にふかく入る事候はばあさましく存候て、

すなはちひるがへすべき事。

一、ひき立つる心なく、大様になり候はば、心中をひきやぶるまゐるべき事。

一、佛法において、うしろぐらき心あらば、あさましく存じ候て、

手をひく思をなし、たちまちにひるがへすべき事。

一、心にひいきをもち候て、人のためにわるき事、つかまつるまじきこと。

一、佛法のかたをばいかにもふかく重く信仰申しわが身をばどこまでもへりくたり候て、たしなみ申す可き事。

一、理非をたださず、悪き事の出来候はん座敷をば、のがれ候べき

事。

一、人がなきなど、わが身に理をつけ候ことあるまじく候。うちの人々にあひ候て、心に思ひ候はずとも、涯分たしなみ候て、まづ此一大事は、いか候はんと申しだし候て、心中を驚き、たしなみ候はん事。

一、ただねがはくば、此一大事に、心をふかく入り、油断なく候へかしと存じ候。御同行の御なほしをば、やがて従ひ申す可き事。

一、かように、申候は、あまりわが心中、おもひ知れもなく、淺間しく候ほどにかやうに心をかたらひ、さだめ候ても、そのするしも候へかしと思ひ候て、かやうにいま申し候。幾重にも、人のおなほしにはしたがひ申す可く候。

一、ねがはくば、御慈悲をべつしてかけられ、ひがめるかたへやらずして、おしなほしてたまはり候へかしと、おもひまゐらせ候事

道宗をおもふ

蓮如上人のお弟子の中で我が同郷の赤尾の道宗は殊更なかしまれる方である。

道宗は四つの時母に別れ十三の時父に死なれた。少くして孤兒となつた少年彌七の胸には父こひし母こひしのおもひが一ぱいになつてゐた。父にあひたい母にあひたいと朝夕おもひ続けた切なるねがひはやがて求道の緒となつたのであつた。古来亡き父母をこひ求めて佛道に入つた方も少くはない。お釈迦様は御母麻耶夫人をしたふ心から出家なされた、道元禪師は母の死によつて深く無常を感じて佛門に入られ、法然上人は父が敵のため殺されたことが縁となり無常のことはり

はいつからかはつきりしないが次のやうないひ伝へがある。

両親をなくした彌七は毎日毎日父母をおもひつゝ、悲しい月日をおくつてゐた。親ある人を見ればその人の幸福を羨み、親のない者を見れば自分の身にひきあてて、あゝ親があつたらどんなであらうと、親を求めぬ切なるおもひがしばらくもやまなかつた。延徳二年のことであるが伯父の淨徳は見るに見かねて彌七に次のことを聞かせた。「筑紫の国に五百羅漢様といふのがある。若しお前がそんなに親にあいたかつたらこの五百羅漢様におまゐりして来るがよい。一人々々おまゐりしてお顔をよくおがんでまはれその中には必ずお前の顔をみてにつこりほほえまれるのがあるにちがひないその方がお前の親だ」と分別ざかりの彌七はこの事をすぐ真に受けたかどうかはわからない。おそらく普通だつたら一笑に附してしまふところであつたらう。それなのに彌七は家を出て筑紫に向つたのである。親に会ひたいの一念からに外ならなかつた。親をたずねて家を出て発つ子供の心は親によばれてゐる姿であつた。

彌七は越前(今の福井縣)の足羽郡まで出かけて来て、ある晩、宿で泊つてゐる夢を見た。「人の氣高い僧があらはれて「あなたが親をたずねて筑紫に行かうといふ心根はまことにいぢらしい。さて筑紫へ行つても本当に親にあへるかどうかはわからない。たとひ親に会へたとしてもその親とまた別ればならぬであらう。はるばる此処までやつて来たあなたに、ことを教へてあげよう。こゝから京都まで行きなさい。」

他の事なく候。

一、淺間しの我が心や後生の一大事を遂ぐべき事ならば、一命をももののかすとも思はず、仰ならば、何處のはてへなりとも、背き申すまじき心中なり、又、唐、天竺へなりとも、求めたつねまゐらせ候はんと思ふ心にてあるものを、これほどは思ひきりなる我が心にてあるに、仰にしたがひ、うしろぐらくなく、法義をたしなみ候はん事は、さてやすき事にてはなきかとよ。かへすがへすわが心、今生は一たんなり。今久しくもあるべからず。飢えても死に、又は凍へもしね、かへりみず、後生の一大事、油断してくれ候な、わが心得、かへすがへす、いま申すところがはず、身を責めて、たしなみきり候べし。かへすがへす御おきて、法度をそむかず候て、然も内心には、一念のたのもしさ、有り難さを、たもち候て、外相に深く、つつしみ申してくれ候へわがごころへ

長谷顯性

をさとり叡山で菩提の道におはிரりになつたときいてゐる。

「ほろほろとなく山鳥の声きけば父かとぞおもふ母かとぞおもふ」行基菩薩の歌ときくがこの中に親をなつかしむ心がうかがはれる。彌七は三十歳頃始めて蓮如上人の教化に浴してゐるがそれまでの彼はどんなおもひでどんな日をおくつたことであらう。

明徳五年の蓮如上人の御文の中には「道宗が毎年京都にまゐつて上人の数をきくやうになつてから六年になる」とあり年齢は「三十才にも足らぬころから大事に心をかけたものである」と記されてゐる。兎まれ上人に謁するやうになつたの

京都の大谷といふところに蓮如上人といふ方がをられる。その方にお会ひすれば二度と別れることのない親を教へて下さるであらうから。「夢の中で感じ入つた彌七は「それならばをしへの通りさういたしましうがあなたはどなた様でございますか」とおたずねすると「私は蓮如上人の友だちだ」といつて姿を消してしまはれた。かくて彌七は京都に上つて蓮如上人にお眼にかかつた。

北越の山奥から眼はきらきら光り耳が大きくつんと立つてゐる小がらなちよこちよこした男何か求めてゐるが求めてゐるものが得られないのでもがもがしてゐる男、切ないおもひを胸にもちながら敢えて人をおしのけて名乗りをあけることもようせずぬる男。しかも心の中に燃えるやうな情熱を秘めてゐる男がやつて来た。彌七のすがたがやがて上人のお眼にとまつて側近の者にあの男はどうした男かとおたずねになつた。「あれは越中の国からまゐりました赤尾の彌七といふものでございます」との返事。かくて上人から道宗といふ法名をいただいたのである。彌七は上人によつて求めてゐた別れることのない親に会ふことが出来た。少年彌七の親を求めぬ切実なねがひは遂に永遠の親に会ふことによつて果されたのである。そこに道宗の念佛の生活が始まつたのである。

私は少年の頃父から聞かされた道宗の聞法の話をおもひ出す。道宗は赤尾から月に一回必ず十里を距てゐる井波の御坊に参詣せられるのが常であつた。当時蓮如上人は北越御化導のため、越前(今の福井縣)の方から加賀今の(石川縣)の

二俣をお通りなつて越中(富山縣)の城端井波に出られ井波御坊でお正月をお迎へになつた。井波御坊は蓮如上人の開創で蓮如上人の叔父に当られる宣祐上人がこのお寺の住持をしてゐられたことのある由緒ある寺である。大晦日に雪が降り出して殊に山は大変な積雪となつた。元日の朝のおつとめにおまゐりに来る人もすくなかつた。大鐘がなり喚鐘がなつたけれども道宗の姿が見えなかつた。この大雪ではさすがの道宗さんも今日だけはまゐられまいと皆うわさをしてゐた。晨朝はもう始まりさうであつた。蓮如上人は「未だ道宗のすがたは見えぬが、それでもおくれでもきつと来るにちがいない、もう少し待つてみよう」とおつしやつてゐた。余程たつて堂衆がもう待つのをあきらめようとしてゐる処へあつたふたと息をはずませ乍ら道宗はやつて来た。汗をふきふき走つて来た。やつと間に会つたのである。そこでもう一度大鐘喚鐘をりんと一しよにならしておつとめが始められたといふ。道宗は年頭まゐりに大晦日に井波に向けて出かけたのだが俄かに降つて来た大雪に道をはばまれてどうしても進むことが出来なくなつた。仕方がないので懐中より御名号をとり出して雪の中に座つておつとめを始めると、忽ち雪の中にすつと井波へ行く路が一寸づ開けたので、おどろいて井波に向つて走らんばかりにかけた。そしておつとめに間にあつたのである。私は今は十年以上にもなるが道宗の遠き末孫道宗道夫師が雪崩の危険を冒して開法のために山からおりて来られたのを嘗つて目撃して感激したことがあるが「あ、これある哉」とおもう

人がやつて来ていきなり足で蹴りたほした。よろめき倒れた道宗は念佛しながら立直つた。その時その男は再び道宗を蹴りたほした。大方彼は腹を立てるだらうとおもつて。然し道宗はよろめき乍ら念佛してまた立上つたのである。この人は心外におもつて三度今度は前よりも強くすしんと突き倒した。今度も道宗は何にもいはずに念佛しながら前と同様立ち上つた。その時その人も驚き入つて道宗に何故おこらないとたすねた。道宗が何と答へたかは失念したがその人はこれが縁となつて念佛する人となつたといふ。こんな話はまだまだありさうである。四百五十年を経た今日、道宗はもう偶像化され超人化されて伝説上の人となつてしまつてゐるかも知れない。然し道宗の書かれた道宗領解二十一ヶ條と称するものを讀むと道宗のありなりの心がいきいきと私共にひびいて来るのを感じる。そこには人間道宗の赤裸々の告白をきくのである。領解第十條には「これほどのあさましき心中を、もちたるよとおほしめし候はん事こそ、かへすがへすもあさましくかなしくつらく存候。今までの事をば、ひとすぢに御免を仰ぐといへども、かやうなる心中なるものよと、おほしめし候はんこと、かへすがへす身のほどのつたなき、かなしさ、あさましくぞんぢ候。前生もかゝるつたなき心中にてこそ、今かやうに候らめと、申すかぎりなく、あさましく存候。……。あらあら冥加なや……。」といひ、同じく十九條には「かやうに申候は、あまりわが心中、思ひ知れもなく、あさましく候ほどに……。」といひ、更に又二十條に「ねがはくば、御慈悲を別

たことであるが、かれこれ、全く開法のためにすべてを捨て、も意に介しないといふ強い精神を見る。本當に道宗は捨命開法の実踐家であつた。「赤尾の道宗申され候、一日のたしなみには朝のつとめにかがさじとたしなむべし、一月のたしなみには近き所御開山様の御座候処にまゐるべしとたしなむべし、また一年のたしなみは御本寺にまゐるべしとたしなむべし」と自らたしなんでゐるのである。またこんな話もきいてゐる。——これは高坂貫昭師に十年程前に聞いたと記憶してゐるが——道宗が上洛される時奥さんからたのまれた京都で蓮如上人からお文——いや御自筆の御名号であつたかも知れない——を特に書いていただけて来てもらひたいと。道宗は承諾したのだつたがすつかり失念してしまつてゐた。

上人の御教化をいただいてゐるといつも初事のやうにいただける。もう何もいふことはない。心ゆくまで開法して長い道中上人のお教を味いつ、道宗は家に歸つた。久々で奥さんの顔を見ると京都でのお教化をとり出して話さずにをられぬい。草鞋も脱かずに戸口に立つて話してきかせた。その時奥さんが約束のものはと催促した。始めておもひ出した道宗は草鞋紐も解かず踵をかへして京に向けて出かけた。驚きながら戸口に立つてゐる奥さんを後に道宗の姿が忽ち見えなくなつてしまつたといふ。この話にも道宗の面目が躍如としてゐるではないか。序にその時道宗のひととなりについて聞いた話をおもひ出した。それはかうである。道宗の信仰をためさうとする人がゐた。或時道宗が水田で草取をしてゐると件の

してかけられ、ひがめるかたへやらすして、おしなほして給はり候へかすと……他の事なく候」といつてゐる。この痛烈な告白はまことに親鸞聖人のお言葉にも通じて私の心のどん底にびんとひびいて来るのである。三十歳にして眞実の親に逢うて念佛申す身となつた道宗は年四十にして(それは文亀元年十二月二十四日であつた)自分に向つてもさげんだのである。念佛申す自分に向つてさげんだのである。念佛申して自分がよくなつたのではない。よくなれないこの自分をよくみそなはしてよくせずにはおくまいとの念佛のよび声に生きてみれば依然としてずぶといこの自分が悲しまれる。ずぶといこの自分はどうすることもできないのだ。ずぶといこの私に大悲の涙がそ、がれていたので。かく知らされてみれば身も心もはりさけるおもひである。ただお念佛である。こゝに道宗は自分の心に向つて我が心やと叫ばずにはをられなかつた所以がある。「後生の一大事のちのあらんかぎりゆだんあるまじき事」(第一條)私はこの痛切なる一句に我が身を反照せしめられる。自分には何が一大事か。自分には一大事があるか。自分はその一大事をゆだんなく心にいれさしていただけるかと。道宗は生涯説法の人でなくて、開法の人であつた。四十八願のおこころを味はふために耕の上に寝たり、蕎麦敷の上に臥せて佛の御苦勞をしのんだりした。その名の如く道を宗とする一生をおくつた人だつた。郷土の先覚者赤尾の道宗をおもふ。

昭和二十六年六月二十五日

編集後記

御盆が参りました。随所に盆踊りの催しやら、墓掃除が出来て、故人を偲ぶこととであります。これは盂盆経にある説法によることとあります。神通第一と云はれます佛弟子目連尊者が、身に得た神通力で亡き母を探しますと、母がいまはしい餓鬼の境界に沈んでゐるのを見出し、色々食物を供へますがそのまま炎となつて、母の身は瘦せ細つてゐるのであります、そして目連の力ではどうすることも出来ない、そこで佛陀に救済の道をたづねるのであります。佛はその時、七月十五日の衆僧の安居の日、その人達を供養せよと勧められる。目連は早速十五日に衆僧を供養いたしますと、不思議にも餓鬼の境界から母が救ひ出されて、親と子が相抱いて歓喜するのであります。そこでお盆のことを歓喜会とも申すのであります。

さてこのことにつき法友西本さんが語られて私も大いに教へられたことであります。ウラボンとは「懸倒」とも「転倒の見」とも云ふのであります。逆さまに木につるされた苦しみの意からは母の苦悩の姿であります。今一つ転倒の見とはその母親の苦は、子供が転倒の妄見をもつて苦しめてゐるとの意味になるのであります。それを見た目連がどうにかしやうとしますが無力なとは、それが転倒の妄見にあるから救へないのであります。即ち佛の教を身に徹して頂く時始めて親不孝な自分が見え始め、親の苦を見るにたまらないのであります。親の苦を以て親の苦を知ることが佛のお育てのお蔭であります。それを自分の力でそれを知らずたと思ひ上るところに転倒の妄見があるのであります。そこに天地一切への御恩を思ひ、その前にひれ伏して参る時妄見が破られて親は救ひ出されるのであります。お盆を迎へまして目連を思ひ佛陀の御恩をしのび、そこに、親と子との歓喜のひかりを数へられることであります。

▲「無碍の一道」はこれで終りました。念佛のひかりに照されて参る信の道の深さ遠さをよく教へられ、一角心得顔を以て解慢界に沈む足下を知らされることでありました。先生は夏を鹿兒島縣、島根縣と巡回して居られます。久遠の友を恋ひてさすらはれるお姿であります。横須賀市船越谷戸三丁目三七が現住所であります。

▼「道宗を思ふ」の原稿は信友の富山縣東礪波郡山野村の長谷顕性さんから頂きました。六月に御来庵下さいまして、日曜講話をして下さいました時、法兄が朝夕に追慕せられる道宗の徳風をお話し下さいました。その時お願ひ申した時御快諾下さつたものであります。襟を正し、永遠の求道者、道宗の信徳を渴仰申したことであります。

▲歎異抄二章の私の領解もこれで終ります。

す。拜読すればしますほど一言隻句の中に無限の深く広い味を知らされ驚くこととあります。歎異抄は生涯、繰り返し繰り返し、其時其時に何時も黄金を掘り出す恩ひのする書であります。先覚者の残して下された最大の遺産であります。御味読下さいやうに念じてやみません

聚墨生

昭和二十七年八月十日 印刷
昭和二十七年八月十五日 発行
毎月一回十五日発行

定価 一年金二百四(郵税共)
半年金拾七四(郵税共)
半年金拾七四(郵税共)

名古屋市南区駄上町二ノ二八
編集人 花田正夫
発行人

名古屋市千種区千種町馬走二八
印刷人 本田政雄
名古屋市千種区千種町馬走二八
印刷所 千草印刷所

名古屋市南区駄上町二ノ二八
一道会館

發行所 慈光社
振替口座番号 名古屋一〇四七〇番

慈光第四卷第七号 昭和二十七年八月十五日 発行(毎月一回十五日発行)
昭和二十四年七月二十三日 第三種郵便物認可